

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）**  
**2019年度研究【経過・成果】報告書**

|  |                                       |       |               |   |           |    |           |   |
|--|---------------------------------------|-------|---------------|---|-----------|----|-----------|---|
| 研究代表者                                  | 所属部局・職                                |       | 氏名            |   |           |    |           |   |
|  | 文学部・教授                                |       | 野中 健一 印       |   |           |    |           |   |
| 研究課題                                   | 博物館収蔵の生活用具から見いだす在来知識とその活用の統合的研究       |       |               |   |           |    |           |   |
| 研究組織<br>(研究代表者・<br>研究分担者)<br>2020年3月現在 | 所属研究機関・部局・職                           |       | 氏名            |   |           |    |           |   |
|  | 立教大学・文学部・教授                           |       | 野中 健一         |   |           |    |           |   |
|  | 立教大学・文学部・教授                           |       | 川口 幸也         |   |           |    |           |   |
|  | 立教大学・文学部・助教                           |       | マンジャン・アレクサンドル |   |           |    |           |   |
|  | 立教大学・理学部・教育<br>研究コーディネーター             |       | 吉澤 樹理         |   |           |    |           |   |
|  | 大東文化大学・文学部・<br>准教授（前立教大学・文<br>学部兼任講師） |       | 厚 香苗          |   |           |    |           |   |
| 法政大学・人間環境学<br>部・教授（立教大学・文<br>学部兼任講師）   |                                       | 湯澤 規子 |               |   |           |    |           |   |
| 研究期間                                   | 2019年度 ～ 2019年度（6月30日まで）（当初2021年度）    |       |               |   |           |    |           |   |
| 研究経費※<br>(上段：支出金額)                     | 2019年度                                |       | 2020年度        |   | 2021年度    | 総計 |           |   |
|  | 627,401                               | 円     | 0,000,000     | 円 | 0,000,000 | 円  | 627,401   | 円 |
| (下段：採択金額)                              | 1,712,000                             | 円     | 2,624,000     | 円 | 1,626,000 | 円  | 5,962,000 | 円 |

※1円単位で記入

|   |
|---|
| <p><b>研究の概要</b> (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)</p> <p>人間の文化を構築する諸要素の中で、生活用具（民具・物質文化）は人々の地域環境に適応してきた歴史・文化が形となったもので、価値観・創意を含む人間性をとらえることができる重要な情報をもつ。この見地にたって、本研究は、博物館が所蔵する多くの生活用具に従来の収集保存から、あらたな情報を引き出すための「在来知識」の視点を提示する。生活用具に関して、①博物館を中心とした収集の歴史と学史の再検討、②地理学・文化人類学・博物館学における比較研究、③収集・保存・記載情報の再検討により在来知識の収集・保存・分析の統合的な新たな方法を提示し、生活用具を活用した人文研究と社会発信の活性化をめざす。</p> |
|---|

|   |
|---|
| <p>キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）</p> <p>[ 生活用具 ] [ 物質文化研究 ] [ 博物館 ]</p> |
|---|

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、まず、研究組織の構成員で、問題意識を共有し、それぞれの専門分野から具体的実証研究に向けた課題の検討を行った。その問題関心と方向性は以下の通りである。

人間の文化を構築する諸要素の中で生活用具(民具・物質文化)は人々の歴史・文化・地理情報だけでなく、環境適応の在来知識、創意を含む人間性をもとらえることができる重要な情報をもつ資料である。実社会では、これらの生活用具の製造とともに利用も少なくなっているものも多く、今となっては用途を推測することすら難しくなっているものもある。多くの収蔵品について使用経験を持つ者が減ってきている現在、その調査は喫緊の課題となる。これらは人類が各地で土地に適応し、さまざまな工夫・イノベーションの蓄積を現す資産である。どう使うのか? どうしてこの形なのか? などの疑問は人間の持つ機能性の追求とともに審美性をも含み、社会経済的な条件の中で、時として政治にも影響を受けて作られてきたものであり、人間の理解を膨らませる実体をもつ資料として実に有用である。生活用具にこうした「在来知識」を見いだすことにより、人の生活が総合的に成り立っていることを紐解き、人間性をとらえることができる。これにより人の可能性・社会の未来可能性の追究に資する物質文化資料となりえ、社会的にその価値が認められることとなる。具体的には、生活用具をいかにして生かしていけるのか、収集の歴史と付加情報の再検討を、関連学史と博物館収蔵の実態から検討する。そして生活用具から引き出せる情報を自然人文社会科学分野から総合的に実証的に考察し、人文資料価値を提唱する。そのために本研究は、生活用具に焦点をあてて、①博物館の収集の歴史と学史の再検討、②国内外の地理学・文化人類学・博物館学における比較研究と相対化、③収集・保存・記載情報の再検討による在来知識の収集・保存・分析の統合的な新たな方法を提示し、生活用具・物質文化を活用した研究・社会発信の活性化をめざす。

この問題意識を具体化して研究を進めるために、6月10日に助成決定の通知を受けた後、6月21日に、構成員全員で研究会を実施した。本研究の学問的枠組みとなる地理学・民俗学・文化人類学での生活用具・在来知識に関する関心の歴史と現状と課題、近代生活史のなかでの生活用具の実証的研究の可能性と関連学問分野の共同化、フランス・ヨーロッパにおける関心动向と博物館展示、日本の博物館における資料収蔵展示の現状、在来知識・生物利用と科学的知見の接合・普及の実践、生活用具収集研究と日本の博物館に及ぼした宮本馨太郎氏の役割と研究課題について発表・議論を行った。そして研究関心を融合して実証的研究の重要さを再確認し、次の3点の共同実証研究案を検討した。

- 1) 生活用具の形態、機能にストーリーも含めたモノグラフ作成
- 2) 在来知識研究として国際的視野にたった人文社会科学分野での再構築と発信
- 3) 歴史・地理(地域性・環境)・文化研究の統合としてのあらたな物質文化研究の構築

これらにより、従来の生活用具の研究対象としての扱いを現在の学界の流れの中でとらえ直し、形態記載・分類や認識論にとどまらない人類智の解明・記述として、物質文化研究と在来知識研究を融合し、これらを扱う基盤として博物館の物質文化研究を再構築し、かつ実証的な研究方法を再構築する。そのために、生活用具への社会的関心を関連分野から学術的に支持し、現地の収集保存活動を支えるための研究と社会活用の枠組みを作ることとを共有した。

本年度は、国内主要博物館での資料収集と情報付加および管理・活用の実態を申請書に計画記載した国内外各所で調査すること、宮本馨太郎氏の博物館学芸員育成と資料保存の体系化の過程を実地調査し整理することを企画し、山形県・オーストラリア・フランスでの現地調査、国内博物館へのアンケート調査を立案した。

しかし研究代表者が前年度に申請していた科学研究費(挑戦的研究<開拓>)が6月28日に交付内定通知されたことにより、本研究の執行が6月30日で停止される事態になってしまい、予算執行も限定された。そのため、予定した現地調査および結果の整理・分析・検討が不可能となった。本研究をもとに20年度に科研費を申請する予定であったが、それ以前に申請したものについても適用されてしまい、計画に基づいた研究を進めることができなくなり、たいへん残念であったが、継続が認められず助成終了となった。

**研究【経過・成果】の概要 つづき**

そこで、本研究の構想や会議で得られた知見から発展できた関連研究の成果を本研究の目的にかなう部分について整理し、研究枠組みの構築、博物館の収集の歴史と学史の再検討、国内外の博物館の比較研究、収集・保存・記載情報の実態と課題を以下に示す。

国内では、1)当該分野に関して主導的役割を担っている①国立歴史民俗博物館、②国立民族学博物館、③滋賀県立琵琶湖博物館、④人間博物館リトルワールド(民営)2)地域の特色ある生業活動と関連用具の展示を行う岐阜県恵那市串原のへボ・ミュージアム(蜂の子食文化展示施設)において共同で実地調査を実施した。

1)では、対象博物館は、生活用具資料の扱いについて国内でトップレベルの規模と蓄積をもっている。それぞれ開設以来、またはそれ以前から他所で収蔵されていた資料を引き継いだ資料は、たとえば国立民族学博物館では30万点を超える資料を収蔵するが、体系的に整理されており、展示においてもすぐに活用できるよう取り出すことのできる体制が整っていた。そして最新の生業研究成果をふまえた博物館展示の思想と技術により効果的に展示されていた。収蔵庫の特性に応じて分けられた部屋における環境管理、時系列もしくは形状特徴による庫内の配置・資料管理と研究資料価値の両面を備えたさまざまなデータ付加において充実していた。資料管理に携わる専門職員の存在は膨大な資料に関する諸情報を継続できる点でたいへん有効である。この知見は本研究目標の③を検討するための重要なこととなる。また、当研究の学問的枠組みにある文化人類学、地理学、民俗学、生態人類学の研究者も在職し、資料を活用している実態(常設展、企画展、博物館研究)を知ることができ、研究目標の①、②の議論や事例に生かしていく事例を得た。この知見をもとにした生活用具に関わる自然と人間との関わり、生物の特性理解と利用、効果的な生活情景説明に関して、展示の実践と分析・論文執筆に至った。

2)では、研究代表者が関わった展示をメンバーにより批評してもらい、今後の実践に生かすことを企図した。これは現実的には多くの博物館が抱えている予算・人員問題において、1)の成果をどのように生かしていくかの構築に関わるものである。この展示では地元の方の知識技術(在来知識)が大いに生かされており、それで賄える規模であること、その文化が継承されていることが重要な課題となるが、このような施設があることにより、外来者による疑問質問と在来知識との往復が可能となり、文化継承への促進の場になることがわかった。これらをもとに全国博物館へのアンケート項目を検討した。

フランスの研究との比較においては、共同研究者アレクサンドル・マンジャンが調査を進めた。独特の文化を有することで民俗学系の保存や展示が比較的熱心に行われているブルターニュ地方の『Musée départemental breton(県立ブルターニュ博物館)』と『Musée de Bretagne(ブルターニュ博物館)』、『Ecomusée du pays de Rennes(レンヌ地域のエコミュゼ)』ロワール地方の『Ecomusée des Bruneaux(エコミュゼ・デ・ブルノ)』を調査した。とくに、オトクトニ(地域性とアイデンティティ)に注目し、建物のフロアプラン、生活用具に関する民俗系資料の展示、そのディレクション、関連資料の収集状況を調査した。地域を特徴づける伝統的な展示のいっぽうで、視聴覚を重視した子ども向けの学習ツール・仕掛けが充実しており、五感で楽しみながら歴史や文化を自発的に学ぶことに注力されていた。地域文化資源の継承の仕方として生活用具が役立てられる可能性を得た。生活用具の総合的理解として特徴付けられる事例は農家の旧家と敷地をまるごと利用している公立のエコミュゼである。農家の母屋は地域の農家・農業に特化した民俗資料を展示する博物館として活用され、また、エントランス施設として新築された建物では季節ごとに地域の農業や生活にまつわる企画展を行っている。そのほか野外では、在来種に特化した生産活動(野菜や果樹の栽培、牧畜)を行い、複層的に民俗文化を学ぶことができる。生業道具資料についても充実した解説のもとに展示がされている。これらは実際の様子ができることにより関心と理解が深まる。専門学芸員もおかれ、専門的な説明を直接受けることも可能であった。これらの事例は研究目標の②③を深めていくことに寄与し、日本における古民家利用や移築建築の民俗展示との比較検討へと今後発展させていくことが可能となることがわかった。

※ この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①厚香苗、博物館育ちの学芸員養成課程教員、國學院大學博物館学研究室『院友学芸員』、13号、2020、12頁。  
Alexandele, Mangin、Little World: Le parc-musée hybride、立教大学 フランス文学、49号、2020、173-190頁。  
Nonaka, K. and Yanagihara, H. Reviving the consumption of insects in Japan: the promising case of *Vespula* spp. wasps. *Journal of insects as food and feed*, 2020, 45-50.  
野中健一、へボ“ボーイ(追い)”メンが駆け回る、あいち海上の森だより、54号、2020、2頁。  
野中健一、小さなジオラマで大きな世界をつくる、地理、2020、4-8頁。  
吉澤樹理、アリの世界を小さなジオラマで大きく魅せる、地理、2020、32-35頁。

②なし

③野中健一、昆虫食からとらえる環境の多様性と変動性の住民の活用、令和元年度岐阜県高等学校教育研究会生物部会研究大会、2019年11月1日、岐阜県立瑞浪高校。  
野中健一、昆虫食の魅力は人にあり!、井川夕学セミナー、2019年11月27日、秋田県井川町。  
吉澤樹理、自然科学分野を知ろう(8分野講演会)、2019年9月24日、東京都立本所高等学校。

④吉澤樹理・今野孝之、「昆虫の体のつくり」におけるアリを用いた教材開発—小学校理科教材の開発と授業設計—、第35回日本教育工学会研究会、2019年10月18日、甲南大学。